君 作歌

竹内

五.

男 君

作

Ш

ふるきもの 光 なきも の渚離りて 0

底ひなき海に抛れば

想ひ出の古りし仕草に いささけき水輪が呼ばふ

告ぐるなりいたき別れを

永遠に絶ゆることなく ひたひたと寄する波間に

万象のよみがへりし はぐくみしなさけ忘れ を ず

真実の旗幟を取り持 ゆくものひたあゆむもの

さだめ故旅を行くな 燃ゆる火の炎立ちに消えぬ
\*\*\* いたましきいのちと云はめ あるはただ宿命 のみなる ŋ

匹

火の神の荒ぶる山を 小船もて浜伝ひ行き 怖<sup>き</sup>れ たちまちに幻惑は裂け みて ゕ へりみすれば

天地は夕焼けにけり くれ なる の血潮流れて ふたたび会ふ事 さあれ吾が幸は希望は なし と

涯知らぬ海さまよひて い着きしは辛夷咲く丘

Ŧi.

静かなり星は降りつつ 友垣とあつく結びてともがき ひたざまに立ちあへぐ夜半は いたましき宿命とか むと

丘高く秀づる草の 溢れ出る 涙 留めて

友よ見よ紅に映ゆるをとも み あけ は

睦びつつ耐へてを行かな 春秋は移りて行けど 歓喜に充てるそよぎを